

第200回

愛知学院大学 モーニングセミナー



アンチ・
アンチエイジングの思想
～ボーヴォワール『古い』を読む～

上野千鶴子（社会学者）

2000年11月15日

シモーヌ・ド・ボーヴォ ワール(1908-1986)

- 1908 (0歳) 誕生
- 1926 (18歳) ソルボンヌ大学入学、サルトルと出会う
- 1929 (21歳) 哲学教授資格試験合格
- 1947 (39歳) ネルソン・オルグレンと出会う
- 1949 (41歳) 『第2の性』
- 1952 (44歳) クロード・ランズマンと出会う
- 1966 (58歳) サルトルと共に来日
- 1970 (63歳) 『老い』
- 1971 (64歳) 「343人のマニフェスト」(妊娠中絶合法化)
- 1980 (72歳) サルトル死去
- 1986 (78歳) 死去



「老いは文明のスキャンダルである」

- 上下巻二段組み計704ページの大著
- 「人間がその最後の十五年ないし二〇年のあいだ、もはや1個の廃品でしかないという事実は、われわれの文明の挫折をはっきりと示している。...この人間を毀損する体制（システム）...を告発する者は、この言語道断な事実（スキャンダル）を白日の下にさらすべきであろう」[上13]
- 「老いた人たちに対して、この社会はたんに有罪であるだけでなく、犯罪的でさえあるのだ。それは発展と豊富という神話の背後にかくれて、老人をまるで非人（パーリア）のように扱う。」[上6]
- 「社会にとって、老いはいわば一つの恥部であり、それについて語ることは不謹慎なのである」[上6]
- 「しかし、それだからこそ、私はこの書物を書くのである、共謀の沈黙を破るために。」[上6]
- 「人間たちがその生涯の最後の時期において人間でありつづけるように、要求することは、徹底的な変革を要求するであろう。そのような結果を獲得するためには、体制を無傷なままに放置して、たんに限定された改良によるだけでは不可能である」[上13]



ボーヴォワールの老いの経験

- 「早くも40歳のとき、鏡の前に立ちつくして、『わたしは40歳なのだ』と自分に向かってつぶやいたとき、私はとうてい信じられなかった」[下333]
- 50歳のときには「あるアメリカ人女子学生からその友人の言葉を告げられて、愕然とした。『じゃ、ボーヴォワールって、もう老女（ばばあ）なのね！』」[下339]



老いと他者化

- 「われわれはみな次のような経験を持っている、---誰かに出会い、ほとんど見分けがつかないのだが、相手も面くらった様子でこちらを見ている。われわれは心の中で思う、彼はなんて変わったんだろう！ 私なんて変わったんだろう、と思われているに違いない！ と。」[下340]
- 「老いとは、客観的に決定されるところの私の対他存在（他者から見ての、また他者に対するかぎりにおいての、私という存在）と、それをとおして私が自分自身にもつ意識とのあいだの弁証法的関係なのである。私のなかで年取っているのは他者、すなわち、私が他者たちにとってそうであるところのもの、であり、しかもこの他者は、私なのだ。」[下334]



老いへの忌避感

- 初めて電車で席を譲られたとき
- 初めて「おばあちゃん」と呼ばれた時
- 孫に「おばあちゃん」と呼ばせない
- 「若いですね（お歳のわりに）」と言われたとき
- ショウウィンドウに映った老人...「あれは誰？」



老いの否定的イメージ

- 「人生で最悪のこと。それは55歳以上であることだ」 ツルゲーネフ
- 「陰鬱で、老いさらばえ、しゃがれた声で繰りごとを言うかと思うと、金切声でわめく」 ホイットマン（下42/366）
- 「顔の形が変わり、いとわしく、見分けがつかなくなる。皮膚のかわりに汚ない皮となり、頬は垂れ下がり、……老人どもは誰もみな同じだ。声はふるえ、手足も同様。つるつるの頭蓋には髪の毛はない。赤ん坊と同じように鼻水を垂らしている。（略）老人にはもう分別なぞありはしない。長い生涯の報いとしては、次々と大切なものを失う淋しさ、うちつづく喪、そして果てしない悲しみにとりまかれた黒い衣服の老い、それだ。」 ユヴェリナス（上141-142）



老いを拒否する思想

- Successful ageing（成功加齢）
- 日野原重明（1911-2017、106歳で死亡、元聖路加国際病院理事長）
- 定義：壮年期を死の直前まで引き延ばす思想
- PPK運動（長野発）
- 突然死は変死
- 平均フレイル期間＝女性10年／男性8年
- 平均寝たきり期間＝8.6ヶ月
- 「ボクの理想の死に方は…」



高齢者の自己否定感

- 迷惑、厄介者視への忌避
- 遠慮、肩身の狭さ
- 「無力な自己」への否定感
- マイノリティのセルフ・イメージ＝支配的な社会の価値観を反映（黒人・女性・障害者・高齢者等）
- もっともつらい差別は自己差別
- 無力感、自己否定感、抑鬱状態



比較老年学の知見

- Q 歴史的に見て、高齢者はいつから厄介者になったのだろうか？
- (1)老人の地位は近代化の程度と反比例する
- (2)人口高齢化率が低いほど老人の地位は高い
- (3)老人の地位は社会変動の早さと反比例する
- (4)定住社会では老人の地位は高い
- (5)文字を持たない社会では老人の地位は高い
- (6)大家族であるほど老人の地位は高い
- (7)老人が財産の所有権を持っているところでは老人の地位が高い [片多1979]



長老志向と若さ志向

- Ruth Benedict 『菊と刀』
- アメリカ社会（移民社会）＝「若さ」志向
- 若いこと、新しいことに価値
- 「お若いですね」がほめことば
- 「古い」は全否定
- アンチ・エイジング
- 生涯現役思想



女性の加齢恐怖？

- 女性に年齢を聞くのは失礼？
- 「若さ」と「美しさ」の一致
- 女性の価値=若さ+美しさ
- 賞味期限つき？年齢と共に低下？逆年令序列
- 「美魔女」「年齢不詳の美女」
- 「おばあちゃんと呼ばれたくない・・・」
- アンチエイジング市場



「かわいい」戦略の罠

- 「かわいいおばあちゃん」になりたい？
- 「かわいい娘」「かわいい妻」「かわいいおばあちゃん」→ジェンダー非対称性
- 「かわいいオジサン」はほめことばか？
- 「かわいい」の謎=相手を決しておびやかさない？
- =弱者の生存戦略
- 「年寄りがかわいくてもかわいくなくてもお世話してもらえるのが介護保険というものよ」（清水好子さん）



老いは女にとっては解放？

- 「老いは、男性と女性にとって同じ意味も同じ結果ももたない。それは女性の場合、特殊な利点がある。更年期以後、女性はもはや性をもたず、婚期に達していない少女と同類となり、少女と同様、ある種の食事上のタブーを免除される。月経の汚れが原因で彼女のうえに課せられていたもろもろの禁忌はとりはずされる。彼女は踊りに加わり、酒を飲み、タバコを吸い、男性と並んで腰をおろすことができる。」（上97）
- 社会的役割からの解放
- 後家楽
- 皇太后権力



エイジズム（年齢差別）

- Barbara MacDonald1994 『私の目を見て』
- Betty Friedan1995 『老いの泉』
- 「年寄り扱いするな」ではなく・・・
- (1) 高齢女性に、あなたはほかの年寄りと違って元気だし生き生きしていると言うことが、褒めことばだと思ってはいけません。もしその女性がそれを褒めことばとして受けとったとしたら、あなたは高齢女性を拒否することに手を貸したことになるます。
- (2) 高齢女性にお年よりもずっとお若いですねと言ってはいけません。それはあなた方の思い上がりであるばかりか、年齢を感じさせることをけなすことにつながります。
- (3) 高齢女性はあなた方若い女性のために存在しているわけではありません。またあなた方が私たちの役に立つと思ってもいけません。
- (4) 高齢女性が昔から歳をとっていたと思ってはいけません。70歳、80歳、90歳がどんなものか、新しく発見する過程にあるのです。高齢女性がこの経験について語れば語るほど、私たちを否定する社会に住む私たちは、それがどんなに革命的なことか、わかってきます。



老いと性

- 「生殖機能が減退あるいは消滅した個人は、それだからといって無性化されたわけではない。」（下51/375）。
- 「女性の場合も性衝動は抑圧されているのであって、消滅しているのではない」（下88/412）
- 老人が若い人びとと同じ欲望、同じ感情、同じ要求を示すと、彼らは世間の非難を浴びる。老人の場合、恋愛とか嫉妬は醜悪あるいは滑稽であり、性欲は嫌悪感を起こさせ、暴力は笑うべきものとなる。（上8）



高齢女性の性

- 「歴史も文学も、年取った女性の性愛について確実な証言をわれわれに残していない。この主題は、年取った男性の性愛よりもさらにいっそうタブー視されているのである。」（下89/413）
- 「幼少年期にコンプレックスを植えつけられたために、性にいやいや従事してきた者は、老齢をよい口実として性愛からまぬがれようとする。私の知っていたある老婦人は若いころ「夫婦生活の苦役」を避けるために医者から診断書をもらっていたが、年取ってから年齢の数がより簡単な逃げ口上となった。」（下54/378）
- 大工原秀子『老年期の性』ミネルヴァ書房1979年
- 「一刻も早く終わってほしい、あのつらいお務め」
- 「生涯、絶頂など感じたことはない、どういふものか知らない」



家族の中の老い

- 「一般に、女性は夫が退職することを恐れている」（同）
- 夫が家にいるのはやりきれませんわ。彼は人がすることが気になって、いろいろ口を出すんです。
- 男たちは...仕事をやめるがはやいか、死んだも同然です。あたしは夫に家にいてもらいたくありません。
- 「成人は自分に依存する老人に対して、陰険なやり方で圧制をふるう。（中略）もし説得や術策によって彼に譲歩させることに失敗すれば、嘘をついたりあるいは暴力に訴えることをためらわない。たとえば、一時的に養老院へはいるように説きふせておいて、そこへ遺棄する。」（上254）
- 退職者の多くは子供たちの近くで暮らすためにそれまでの住居を離れるが、子供たちは彼らにかまってはくれず、結局むだに自分の生活習慣を犠牲にしたことになる。（上308）



老人性愛文学

- 谷崎潤一郎『鍵』 56歳『瘋癲老人日記』 77歳（2005年）
- 川端康成『眠れる美女』 60代
- 桐野夏生の『魂萌え！』（2005年） 60代
- 岸恵子『わりなき恋』（2013年） 69歳
- 松井久子『疼くひと』（2021年） 70代
- 李昂『眠れる美男』（2017=2020年） 50代



ボーヴォワールの性愛

「私は肉体を取り戻した」

- 39歳でネルソン・オルグレン（1歳年下）と出会う（『レ・マンダラン』人文書院1979年）
- 「彼の欲望が私を変貌させた。あの様に長い間、嗜好もなく、形態もなかった私が、再び両の乳房を、腹を、性器を、肉を所有したのだった。」
- 「私は二十歳なのだ。私は、今、初恋を生き、これが私の初めての旅行なのだ。（中略）私のすでに古びたいのちで、私のもはやあまり若々しくない身体で、私は愛する男のために幸福をつくりだしているのだ、なんという幸福だろう！」
- 44歳でクロード・ランズマン（17歳年下）と同居（「ショア」の映画監督）
- 「私は彼女の生涯の最後の数年間をできるかぎりその近くにいて過ごした。（中略）一九八六年の彼女の死に先立つこの何年かを、私はほとんど幸福な時期の記憶として思い起こしている」（『パタゴニアの野兎 ランズマン回想録 下』）



サルトルの恋

- 1929 ボーヴォワールと出会う
- 1933 ボーヴォワールと契約結婚
- 1935 オルガ
- 1938 ナタリー・ソロキーヌ
- 1939 ビアンカ
- 1946 ドロレス・ヴァネッティ
- Menage a trois (三角関係)
- ボーヴォワール1943『招かれた女』



文化の中の老い（老人の処遇）

- 老いた個体を扶養する動物社会はない
- 賛老と嫌老
- 1) 扶養 35%の社会
- 2) 冷遇
- 3) 遺棄・殺人 19%の社会
- 「健康な老人は、尊敬・愛着の対象として大切にされるものの、いったん老人に心身の衰えや、老衰・痴呆などの症状が現れ始めると、彼らは社会のお荷物になり、冷たくあしらわれることになる」（『老いの人類学』）
- 深沢七郎『樗山節考』おりんばあさん（伝承では60歳、小説では70歳）



老いの社会保障

- 「老人をどう処遇するかでその社会の質が問われる」
- 「豊かな社会のみが多数の老人をもちうるのだ、とハリントン
ンは結論する、しかし、この豊かな社会は豊饒さの果実を彼ら
には拒否するのである。この社会は彼らに「かつかつの余命」
をあたえるだけで、それ以上は何もあたえない。」（上286）
- 「完全に非人間的」（上293）=部屋は大部屋、規則は厳しく、
ユニフォームを着せられ、面会は稀で、外出は制限
- 家族がバカンスに行くため老人を病院に預け、そのまま迎えに
来ないことがよくある（フランス）
- 「人びとは働く能力のない老人がなんであれ権利をもっている
とは考えず、彼らを怠け者、落伍者、屑として扱った。彼らを
扶養する義務は本質的に家族に帰属するのだ。」（19世紀アメ
リカ）



高齢社会保障の条件

- 「まっとうな年金と住居があれば、彼は意気阻喪をともなう屈辱感からまぬがれ、最小限の社会生活が可能となるであろう」（上巻p317）
- 1960年定年退職者向けのアンケート「だれ一人老人ホームに行くことは望まず、自分の家にとどまることを願っている」（上281）
- 「おひとりさまでも最期まで在宅で」
- 住宅＋年金＋医療＋介護（日本は国民皆保険を達成した！）



超高齢社会=人生100年時代

- 人生のピークはいつだったか？[上野2005]
- 前半生=上り坂：成長、発展、進歩！
- 後半生=下り坂：成熟（衰退、縮小、退歩）
- 前進戦より後退戦のほうがむずかしい
- 上り坂を登るノウハウはあるが、下り坂を降りるノウハウはない
- 個人史の上り坂／下り坂と社会史の上り坂／下り坂



毎日を前向きに生きる元気高齢者が考えようとしないこと。

長寿社会（男性81.64歳、女性87.74歳）
90歳を超えて生きる確率 男性4人に1人以上
／女性2人に1人以上

上野推薦文：

長生きは地獄か極楽か？元気高齢者に学ぶ老後の備え。

老後不安を「子どもに丸投げする」高齢者、
「丸投げされる」子どもたち、
そして「丸投げする子どものいない」高齢者。
どのひとにも読んでほしい。

春日キスヨ2019『百まで生きる覚悟 超長寿時代の「身じまい」の作法』光文社新書





読書

Books



上野千鶴子 が読む

Ueno Chizuko

◇「ええのち」 1948年福山県生まれ。社会学者、東京大学教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長。著書に『楽な死と楽な生』『おひつり』など。老後（時間宣言）（新刊）など多数。

「丸投げする子どもはいない」高齢者とのひびきも感じている。そして丸投げされる子どもは「母は、倒れた時のために自分たちにかかっているからと考えている。たゞにかかっている。と私どもを疑っている」。

「これからのことを一掃しきよと夫に言っても『死んだ方が静か』と考えている。これからは子どもが頼り、頼れなかったらどうしよう。この介護の現場は高齢者の意思決定権がキーワードになっている。だが、どうしたいの？と尋ねても『おまわりが、考える』と。日本の高齢者は受容性（せうせいの）を返さなかった。こんなには生きずやうになんては思ってもいなかったのに、その勢は変わっていない。うた。

松原啓子さんに『生き地獄』S.B.新書2011年という本がある。長生きしたくない、長生きしてめんない、と年寄りと言われたら、本気で生きる気持ちは前向きだが、そのガタイ（がたい）が、何も考えない、とろろろと来るとは、それは怖い。

最後に、自分たちは長寿期への備えとして具体的な準備を挙げている。「75歳以上、ひびき尊つ、転倒して大動脈解離、入院、手術。退院して自宅に帰る。ケース病に罹り、わたったドパミンをくれる、参考に」。



光文社刊・880円

◇かすが・きすよ 1943年熊本生まれ。京都精華大学教授、松山大学教授などを歴任。専攻は社会学、障害者・高齢者介護問題などについて、現場の支援者と協働して研究を続けてきた。

100歳長者が万人を超したという、社会学者の春日キスヨさんが元高齢者に取材して本を書いた。以下は本書に出てくる元高齢者たちの会話。

「子どもの世話にはならない」「私もうなれたくない」

「じゃあ、介護が病院希望なんですか？この施設に入ると誰が面倒みる？それは子どもに頼むと思う。私ではよくわからないから」

夫婦どちらかの介護が必要になったらどうします？と訊かれた元夫婦は「夫（い）がプラス思考で物事を迎えてきた。だから、その本がダイナミックなところ（介護が必要になったら）特別介護をホームに入る。申し込んでおくには入れないというんですよ」

「愚者が何をしてやるかと思いつく妻（キスヨ）は、それはいい。うのが主たる生活で、私もそれに従ってきた。だから介護が必要にな

春日 キスヨ著

『百まで生きる覚悟』

丸投げしない長寿期への備え

「前向に生きているからそんなネガティブなことは考えない」高齢者＝その日暮らし／思考停止

サクセスフル・エイジング＝壮年期を死の直前まで引き延ばす思想のこと



必ず来るヨタヘロ期

フレイル期間が長い
(女性12.35年、男性8.84年)

栄養水準
衛生水準
医療水準
介護水準が高い！



おひとりさま の老後



結婚してようがいまい
だれでも最後はひとり
「これで安心して死ねる

2007

14年で何が変わったか？

男おひとりさま道

男おひとり



死別・離別・非婚シングル
老後に生きる道はあるか
在宅ひとり死は
こわくない

2009

おひとりさま の最期



上野千鶴子

2015

在宅ひとり死の ススメ

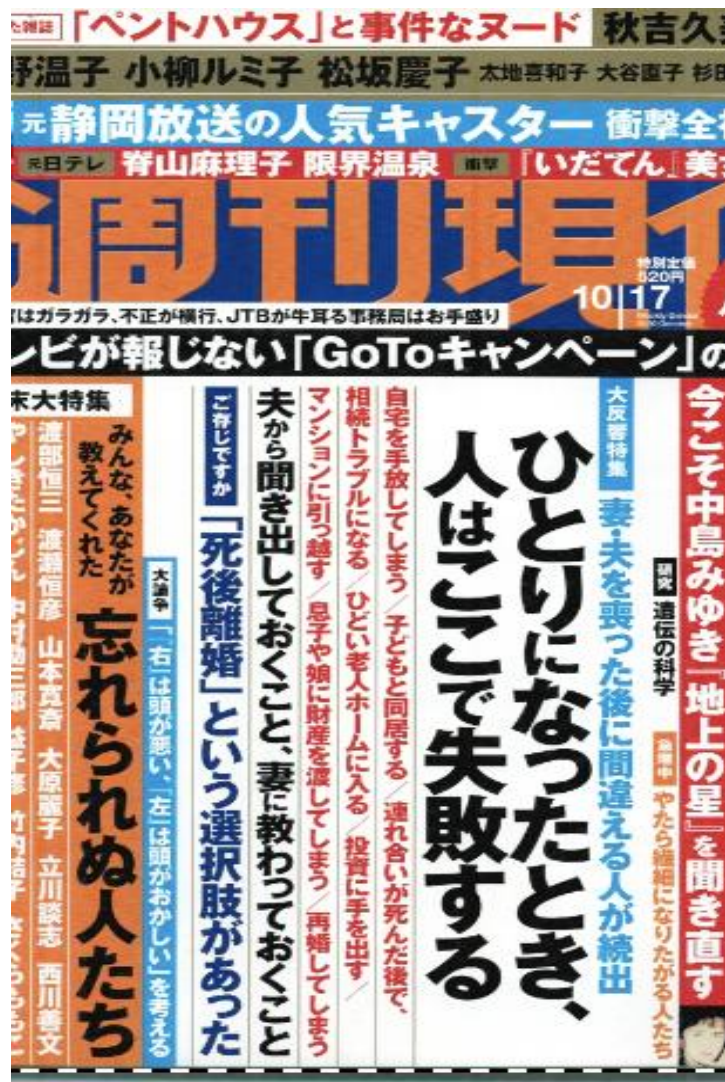
上野千鶴子

累計**111万部突破**
「おひとりさまの老後」
シリーズ最新作

おひとりさまでも、
認知症でも大丈夫。
慣れ親しんだ自宅で
幸せな最期を
迎える方法。

文春新書 1295





昨日の常識は今日の非常識になった？

やってはいけないこと
 再婚する／子どもと同居する／家を手放す／老人ホームに入る／子どもに財産を渡す



中西正司 著
上野千鶴子

当事者主権



高齢者、障害者、女性、患者、不登校者…

当事者が 社会を変える

緊急かつ大胆な提言の書

岩波新書

定価(本体 700 円+税)



当事者とは誰か？

- 「当事者能力」をもっとも奪われてきた人たち
 - 「わたしが誰か」を他人に決められてきた人たち
 - 女性、子ども、高齢者、障害者
 - 当事者運動
- 社会的弱者（マイノリティ）の自己定義権の要求



当事者主権とは何か

- 「利用者本位」「消費者主権」
- 「当事者主義」ではなく・・・
- 「自立」と「自律」のちがい
- 「自己決定・自己責任」はネオリベの原理
- 「主権」=他人に譲渡できない至高の権利／自分の運命を自分で決める権利（国民主権）

→わたしのことはわたしが決める



「介護」と「介助」のあいだ

- 介護保険法の「自立」＝介護を必要としない状態
 - 障害者自立支援法の「自立」＝介助を得て自己決定できる状態
- 障害者の権利擁護運動に比べて
高齢者の権利擁護運動は遅れている



「自立」のパラダイム転換

- 「自立」＝依存のない状態？
 - 「自立」神経失調症
 - 「かわいいおばあちゃん」の罠
介護保険＝「かわいくても、かわいくなくても・・・」
 - 「私は生きるために誰かの助けが必要だ」
- 「だからと言って、その人に従わなければならない理由はない」



当事者「である」ことと 当事者「になる」こと

- 自分のニーズの主人公になる（権利の主体）
- 介護保険の「利用者」とはだれか？
- 要介護（要介助）者の利害と家族介護（介助）者の利害はちがう
- 家族介護者というもうひとつの当事者性【光成2003】



介護される側の心得10ヶ条

- (1)自分のココロとカラダの感覚に忠実かつ敏感になる
- (2)自分にできることと、できないことの境界をわきまえる
- (3)不必要なガマンや遠慮はしない
- (4)なにがキモチよくて、なにがキモチ悪いかをはっきりことばで伝える
- (5)相手が受けいれやすい言い方を選ぶ
- (6)喜びを表現し、相手をほめる
- (7)なれなれしいことばづかいや、子ども扱いを拒否する
- (8)介護してくれる相手に、過剰な期待や依存をしない
- (9)報酬は正規の料金で決済し、チップやモノをあげない
- (10)ユーモアと感謝を忘れない [上野2007：197]



増補・介護される側の心得

- (1)プライドを捨て、「わがまま」と言われるのを怖れない
- (2)相手がボランティアでも、言うべきことははっきり言う
- (3)排泄介助には、自分のお尻だと思ってケアしてもらおう
- (4)「もういい？」は、ケアする側にとって禁句
- (5)自信過剰になり、迷いを失ったケアには落とし穴がある



「介護されるプロ」

- 小山内美智子1997『あなたは私の手になれますか』
- 「私は国家公務員」
- 介護者教育に介護を受ける者が参加すべき
- →「なにをしてほしいかはわたしに聞いてください」
- 「ためらいのない介護は堕落する」



弱さの情報公開

- 「助けて」というスキル
- 男は男に認められたい
- 男同士の関係は死ぬまでパワーゲーム？
- 男は同性（男）より異性（女）に弱音を吐きやすい
- 女性の集団に参入するのが秘訣？



男の得意技？

- 1) 現状否認
- 2) 現実逃避
- 3) 嗜癖
 - 1) →まさか、そんな、ありえない
 - 2) →見たくない、聞きたくない、考えたくない
 - 3) →はまる、おぼれる（酒、クスリ、ギャンブル、女）
- +4) 反撃（切れる）



社会的弱者に学ぼう

- 「弱さの情報公開」（べてるの家）
- SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）
- ピアカウンセリング
- 自立訓練（外出、外泊）
- 居場所づくり



「助けて」というための 作法と技法

- 1) 自分の弱さを認める
- 2) 何に困っているか（ニーズ）を言語化する
- 3) 安心して話せる相手を見つける
- 4) 泣いたり、怒鳴ったり、キレたりしない、自己主張の訓練をする
- 5) 卑屈にならず相手に要求する
- 6) 感謝とユーモアを忘れない



当事者研究

『臨床心理学』増刊9号
2017.7 金剛出版

上野千鶴子「当事者研究としての女性学」



当事者の知 熊谷晋一郎

- 「自立とは依存先の分散である」
- 「自律autonomy」と「自立independence」の違い
- 「自律」は「依存の不在」ではない



依存の需要と供給

- 需要の独占=共依存（わたしなしではあなたは生きていけない）
- 供給の独占=搾取（あなたはわたしだけのためにいる）
- 需要の独占を拒否→障害者運動
- 供給の独占を拒否→父母の会
- 需要と供給を分散してケアする側もケアされる側も「自立」を果たす！



文明をつくりかえる！

- 成長と競争から支えあいと分かちあいの社会へ
- 「相互依存が恥ではなく、誇りであるような社会・・・」

（上野1990 『家父長制と資本制』）



「役に立たなきゃ、生きて ちゃいかんか」

- 死に方は最高の教育
- 衰えた姿も見せてほしい
- ACPにも安楽死にも反対する理由



『家父長制と資本制』 [上野 1990]

「最後に、ありとあらゆる変数を問わず、労働の編成に内在する格差の問題が残る—それは、なぜ人間の生命を産み育て、その死をみとるという労働（再生産労働）が、その他のすべての労働の下位におかれるのか、という根源的な問題である。この問いが解かれるまでは、フェミニズムの課題は永遠に残るだろう。」

「相互依存が恥ではなく誇りであるような社会…」

[上野1990／2008]



超高齢社会を生きる道

- 安心して弱者になれる社会を！
- 安心して要介護になれる社会を！
- 安心して認知症になれる社会を！
- 障害を持っても殺されない社会を！



ボケても人生は
終わらない
ボケた姿をさらす勇気
人はどう老いるか？



ボクはやっと
認知症の
ことがわかった

自らの
認知症になった
専門医が、
日本人に
伝えたい遺言

KADOKAWA



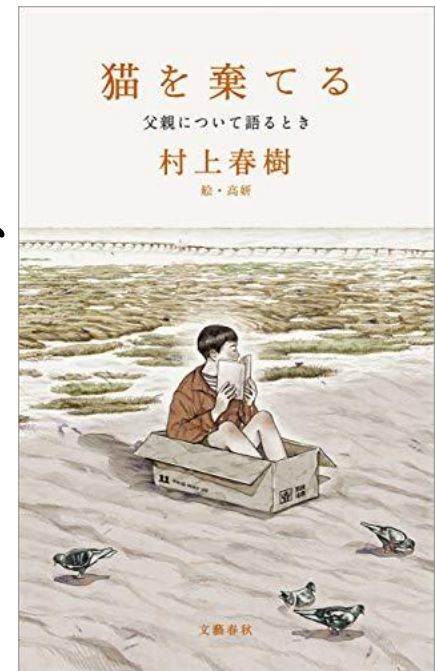
老いたゲーテ

- 「ある日、講演をしている途中で、彼の記憶力が喪失した。二〇分以上ものあいだ、彼は黙ったまま聴衆を見つめていた。聴衆は尊敬の念から身動きひとつしないでいたが、やがて彼は何ごともしなかったようにふたたび話しはじめた。このことから判ることは、ゲーテの外見的な均衡も実は多くのささいな機能減退の克服のうえに成り立っていたということである。最晩年には、彼はかなり疲れやすくなり、朝のうちしか仕事をせず、旅行もあきらめた。日中、彼はしばしば居眠りをしていたという。」（下43/367）



村上春樹『猫を棄てる』2020年

- 「我々は、広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒の、名もなき一滴にすぎない。固有ではあるけれど、交換可能な一滴だ。しかしその一滴の雨水には、一滴の雨水なりの思いがある。一滴の雨水の歴史があり、それを受け継いでいくという一滴の雨水の責務がある、我々はそれを忘れてはならないだろう。たとえそれがどこかにあっさりと吸い込まれ、個体としての輪郭を失い、集合的な何かに置き換えられて消えていくのだとしても。いや、むしろこう言うべきなのだろう。それが集合的な何かに置き換えられていくからこそ、と。」



「そのなかに私の人生が刻みこまれているこの人類の冒険」

- 「世のすべての人びとと同じように私は無限を想定することができないが、しかし有限性を受諾しない。私は、そのなかに私の人生が刻みこまれているこの人類の冒険が無限につづくことを必要とする。私は若い人びとが好きだ。私は彼らのなかにわれわれの種「人類」が継続すること、そして人類がよりよい時代をもつことを望む。この希望がなければ、私がそれに向かって進んでいる老いは、私にはまったく耐えがたいものと思われるだろう。」（下163/487）
- 「子どもをもちたいとけっして願わなかったこの女性が世界じゅうの何百万の娘たちの精神的な母であることはなんという矛盾であり、なんという勝利であることか！」エリザベート・バダンテール



史上最悪の介護保険制度改定を許さない！！



1. 自己負担2割を標準にするな
2. 要介護1・2の訪問介護、通所介護を地域支援・総合事業に移すな
3. ケアプランを有料にするな

4. 福祉用具の一部をレンタルから買い取りにするな
5. 施設にロボットを導入して職員配置を減らすな



署名サイトはこちらです

署名活動 認知症人と家族の会 [HTTPS://WWW.ALZHEIMER.OR.JP/?P=52799](https://www.alzheimer.or.jp/?P=52799)

介護保険：負担が2倍で使えない！～原則自己負担2割化、ケアプラン作成の有料化、要介護1と2の保険外しなど負担増に反対します～

介護保険 制度があっても、使えない！
1割→2割負担へ **費用が2倍に！**
負担増に **反対** します！
#自己負担2倍 #ケアプラン作成有料化 #要介護1と2の保険外し
→知らないところで改正の議論が進んでいます！

41,826 人が賛同しました。もう少しで 50,000 人に到達します！



佐藤 文久さんが8 分前賛同しました



魯山 洋子さんが42 分前賛同しました

あと8,174名の賛同者で目標に達します！
このキャンペーンの成功を後押しするために、力を貸してくださいませんか？

**キャンペーン成功のために、賛同を
広げよう！**



発信者：公益社団法人 認知症の人と家族の会 宛先：加藤 勝信（厚生労働大臣）

